発表番号 1

小学校家庭科における味覚教育を用いた授業の検討

○神田真帆(広島大学大学院人間社会科学研究科)
伊藤優(広島大学大学院人間社会科学研究科)

1 目的

近年，朝食欠食や偏食(白川ら，2017)，味覚識別能力の低下(早渕，2017)など，子どもたちの食の課題は多様化・深刻化している。白川ら(2017)は，幼児期から学童期に食の乱れが生じると，将来の生活習慣病リスクが高まる可能性があり，五感を研ぎ澄ませて味覚感度を向上させる教育が必要であることを述べている。こうした背景から，1970 年代にフランスで提唱された，五感を使って食べ物と向き合い，感じたことを表現する「味覚教育」に着目した。これまでにも，味覚教育を取り入れた先行研究はいくつかみられ，味覚教育を小学校家庭科の調理実習場面に取り入れ，調理技能習得を目指した実践(佐藤，2014)や，五感を生かした一汁三菜の献立の作成を通じた実践的な態度の育成(小林ら，2022)等が挙げられる。しかし，味覚教育を取り入れることによって，子どもの食への関心や理解にどう影響を与えるのか，また実際の給食場面への影響については，詳しく明らかになっていない。

そこで本研究では，小学校家庭科において味覚教育を取り入れた授業を開発・実践し，児童の食への関心や理解の促進，および実際の給食場面に与える影響を明らかにすることを目的とする。

2 方法

1）広島県内のＡ小学校第５学年２クラス(計 60 名)を対象に，家庭科単元「食べて元気に！」(開隆堂)において計８時間の実践を行った。授業では味覚教育のガイダンス，五感・五味の説明，いりこを用いただしあり味噌汁と，お湯でといただしなし味噌汁の比較体験，２種類のお米の食べ比べなどを実施した。また，給食時間との連携として，日替わりのお題(例：「今日の給食で１番いい音がしたのはいつ？それはどんな音？」)に沿って五感を意識して食べる「五感ガチャ」という活動を継続的に取り入れた。

2）授業前，授業直後，授業２週間後の計３回，食に関する質問紙調査(18 項目・４件法)を実施し，対応のあるｔ検定を用いて，五感の使用や食への関心の変化を分析した。

3）授業前後の子どもたちのワークシートの記述内容から，五感に関する語彙の使用状況を分析した。

3 結果と考察

1）質問紙調査の結果，ほとんど全ての項目で，授業前より授業後の平均値が高くなった。特に「どんな材料がどのように料理に使われているのか知りたい」($p<0.01$)や「食べ物の味のちがいを感じとりたい」($p<0.01$)といった項目で強い有意差が見られた。これは，味覚教育を取り入れた実践が，子どもたちの食の関心を高めたことを示唆している。

2）授業後は，視覚(食べるとき，食べ物の色どりについて，心の中で考えたり，考えたことを口に出したりすることがある)(71%→86%)や嗅覚(食べるとき，食べ物の匂いについて，心の中で考えたり，考えたことを口に出したりすることがある)(86%→94%)を意識して食べる肯定的な回答が顕著に増加した。これは，味覚教育を取り入れた授業や，五感ガチャの取り組みから，これまで無意識に食べていた状態から，五感を意識して食べることに変化したためだと考えられる。

3）ワークシートの分析では，嗅覚(2.0%→4.1%)や味覚(19.9%→27.6%)に関する語彙の使用率が上昇した。記述量は減少傾向にあったが，一文の中に複数の五感を組み合わせて表現する子どもたちが増え，食材を多角的に捉える傾向が見られた。

発表番号　2

家事体験を通した生活実践力を育む中学校家庭科の授業開発
―生徒のレディネスに着目した分析を通して―

○霍沢魅玲　岡山大学教職大学院
森千晴　岡山大学学術研究院教育学域

1　目的

近年、核家族化や共働き世帯の増加，仕事中心のライフスタイルの広がりなど、家庭を取り巻く環境は変化している。それに伴い、生活において簡便性や効率性が重視されるようになっている。そのような中で、家庭科教育においては、生活に必要な知識や技能の習得にとどまらず、生活を自ら整える主体としての意識や態度の育成が求められている（花形，2017）。中央教育審議会（1996）「21 世紀を展望した我が国の教育の在り方について（第一次答申）」では、家庭での生活経験の乏しさや生活課題への無関心さが指摘されており、実践的な体験を通して生活への気づきを促す必要性が示されている。しかし、NHK(2022)「中学生・高校生の生活と意識の調査」では，家庭での手伝い経験の減少が報告されている。このことから、25 年以上が経過した現在においても、子どもが家庭の一員として参画し、生活を自分事として捉える意識が十分に育っていないことが課題であると考えられる。そこで本研究では、家事体験を取り入れた中学校技術・家庭 家庭分野「A 家族・家庭生活」領域の授業を構想・実践し、ワークシートの分析及びアンケート調査によりその効果を検証することを目的とした。

2　方法

0 市立 J 中学校の中学１年生２学級を対象に、家族・家庭生活領域において家事体験を取り入れた全３時間の授業実践を行った。授業では、家族へのインタビューや家事体験活動を通して、家庭生活における自身の役割や家族との関わりについて考える学習を実施した。授業中の発言や行動、ワークシートの記述より生徒のレディネスを分析したところ、調査対象とした２学級の生徒の生活経験や家庭での実践状況などが異なっていたことから、授業前、授業後、授業から３か月後の計３回実施したアンケート調査結果について、２学級それぞれの５件法の平均値を比較・分析した。

3　結果

（1）　ワークシートの記述分析

１時目のワークシートを分析した結果、A 組では「母がやっている」「父と弟はあまり家事をやっていない」といった記述から母親に家事の負担が偏っていたり、女性に偏っていたりする傾向がみられた。B 組では「結構手伝いはしていた」「みんな自分にあった家事をしている」といった記述から家庭の一員として自ら家事に関わっていることを再認識する記述が見られた。

（2）　アンケート調査

家事の実践状況では、A 組は家事の種類によって実践度に差が見られ、比較的取り組みやすい家事に偏る傾向が見られた。一方、B 組では家事の種類による大きな差は見られず、様々な家事に取り組んでいた。家事に対する意欲に関しては A 組では項目によって変化の幅に違いが見られた一方、B 組では比較的安定した変化が見られた。また、家族との関わりに関する項目では、A 組は授業後に一定の変容が見られたものの、その後の継続には課題が見られた。一方、B 組では、家族から家事を任され、認められていると捉える傾向が高まり、授業から 3 か月後もその傾向が維持されていた。このことから、家庭における保護者との関わりが、家事の継続的な実践を支える要因の一つである可能性が示唆された。以上のことから、「A 家族・家庭生活」領域では生徒のレディネスを踏まえた授業づくりの重要性が示された。また、保護者が家事を任せるだけでなく、実践を褒めたり認めたりする関わりは、ケアリングにおける受容と応答の視点とも関連し、生徒の実践を促す要因になると考えられる。今後は、生徒の生活経験や家庭での家族との関わりを踏まえながら、一人ひとりの実態に応じた授業づくりについてさらに検討していきたい。

発表番号　3

食材購入における価値観の可視化と消費者市民としての意識形成
― 家庭科と公共を関連付けた教科横断型授業の実践 ―

〇森脇　好恵　　島根県立松江南高等学校

1 目的

近年、消費者を取り巻く社会環境は複雑化しており、商品選択には価格、品質、安全性、環境負荷、地域性など多様な価値判断が求められている。一方、現在の高校生は新型コロナウイルス感染症拡大の影響により、小・中学校段階で十分な調理実習や協働的な学習活動を経験できないまま成長してきた。そのため、実体験を通して多角的に考え、他者と価値観を共有しながら意思決定する学習機会の保障がこれまで以上に重要となっている。高等学校の家庭科では食生活と健康管理、消費と経済生活などを単元ごとに学習するが、生徒自身が実際の食材購入において多様な価値観を十分に自覚しているとは言い難い。そこで本研究では、調理実習に伴う食材購入場面を題材として、生徒の価値観を可視化し、その共有を通して消費者市民として考える視点の形成を促す授業実践を行った。また、公民科「公共」と関連付けることで個人の消費行動と社会的責任との接続を図り、教科横断的な学びの可能性を探った。

2 方法

対象は本校２年普通科１クラス・生徒 40 名である。調理実習は５クラスで実施し、本研究ではそのうち教科横断型学習として実践した１クラスを対象とした。教科横断型授業は 50 分１時間構成で、公民科教員と共同授業を行った。調理実習は４人１班とし、１人当たり 500 円、計 2,000 円の予算内で、米を主食とし卵料理を１品含めた栄養バランスのよい弁当を班で自由に計画させた。班員がそれぞれ１品ずつ調理を担当することを条件とし、必要な食材を検討したうえで、実習前日の放課後に現金を持って学校近隣のスーパーへ班ごとに買い物に行き、２時間で調理実習を行った。実習後に、価格、栄養、ボリューム、彩り、産地、安全性、調理のしやすさ、班員の好み、満足感、時間効率の観点から、「何に価値を置いて食材を購入したか」をワークシートに記述させた。さらに購入物の記録写真とレシートを班内で共有し、全体で発表を行って多様な価値観を比較した。公民科「公共」における消費者の権利と責任、持続可能な社会形成等の視点を導入し、自分たちの消費行動と社会とのつながりを考察させた。教科横断型授業後に回収したワークシート35名分の記述を整理し、価値判断の特徴を分析した。

3 結果

回収したワークシートから、今回の食材購入においては、多様な価値基準が可視化された。価格のみならず、時間効率、産地・地産地消、品質、栄養、満足感、好み、予算管理等、複数の価値基準に基づく記述が見られた。各班それぞれ異なる献立の弁当が完成し、同じ予算・条件の中でも、何を重視するかによって選択が異なることが可視化された。また、班内で話し合い、発表による全体での共有を通して、自分とは異なる価値観に気づく姿が見られた。さらに、レシートを用いた振り返りでは、消費税、産地、生産者、流通、地域経済等に視点が広がり、消費行動を社会とのつながりから捉える記述が確認された。本実践では、食材購入という身近な生活場面を通して、生徒一人一人の価値観を言語化・可視化し、他者との共有によって多様性を認識する学びにつながった。また、レシートを媒体として、家庭科での生活経験を公民科「公共」の社会的・公共的な視点へと接続することができた。以上から、家庭科と公共を関連付けた教科横断型授業は、生活に根ざした意思決定を社会との関わりの中で捉え直し、消費者市民として考える学びを支える可能性が示唆された。